

医学系研究に関する情報公開文書

研究課題名	COVID-19感染拡大の長期化に伴う、救命看護師への心理的影響
研究責任者	矢吹真理
研究機関名	日本赤十字社医療センター
研究目的と意義	2020年以降の当院救命救急センター各部署機能として、EICUは重症COVID-19専用病棟となり、救急外来は疑い患者含めた対応と併せてが外来制限に伴う電話対応、救急病棟では原則COVID-19患者直接対応はないものの通常時に比しより重症の患者の受け入れをしています。救命救急センター内でも、EICUは最前線、救急外来は最前線と側方／後方支援が混在し、救急病棟は側方／後方支援を担うともいえます。 COVID-19感染拡大下では、COVID-19治療に携わる最前線医療従事者の中～高程度のストレス、うつ、不安、不眠、バーンアウトが報告されています(Danet,2021)。2000年代初頭のSARS研究では、長期観察で医療従事者のバーンアウトと全般的なストレスが持続しており(Maunderら,2008)、COVID-19対応長期化に伴う心理的影響としてバーンアウト生起は危惧されます。もともと救急医療やICUで勤務する看護師は、バーンアウトやPTSDが多いとされています(Colvilleら,2019)。バーンアウトが引き起こす結果として、精神症状に加え離職率の増加、患者満足度とケアの質の低下は指摘されます(Mossら,2016)。 COVID-19対応と通常業務が並行する期間が続き、各部署において、スタッフが抱えるこれまでにない負荷が長期化することで、実際の問題としてのスタッフのうつやバーンアウト、離職の発生も懸念されます。本研究では、心理的状態の測度として、本邦でも多くの医療従事者対象研究で採用される、PHQ-9、日本版バーンアウト尺度(久保,2004)を使用しました。COVID-19対応が長期化する中、救命救急センター内でありながら、最前線と側方／後方支援と各々機能が異なる部署間における比較を行い、業務に従事する職員の心理的影響を探索的に調査することを目的としています。調査結果から、スタッフのサポートすべき心理的側面が明らかになることで、COVID-19対応が長期継続するスタッフへの効果的な支援立案が可能となります。
研究方法	院内の職員支援チーム活動の一環として、救命救急センター看護師のケアとヒアリングを兼ねた臨床心理士による面接(個別ないし小グループ)を行い、その中で質問紙を実施、調査項目への回答を得ました。対象期間は2020年11月～1月。救命救急センター看護師79名を分析対象としました。調査項目はPHQ-9(抑うつ指標)、日本版バーンアウト尺度でした。PHQ-9、バーンアウト変数(情緒的消耗・脱人格化・個人的達成感の低下)について部署間比較を行います。 本データは、個人情報保護した形で学会で公表いたします。研究に参加を希望されない方は、ご連絡をいただけますようお願いいたします。なお、研究参加されなくとも、不利益はありません。
問い合わせ先	日本赤十字社医療センター 〒150-8935 東京都渋谷区広尾4-1-22 担当者：矢吹 真理 TEL：03-3400-1311 FAX：03-3409-1604